



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「の」と「こと」をめぐって：音声学的分析からの考察
Author(s)	山下, 好孝; Yamashita, Yoshitaka
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 10, 135-147
Issue Date	2006-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/45666">https://hdl.handle.net/2115/45666</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC010_008.pdf



# 「の」と「こと」をめぐって — 音声学的分析からの考察 —

山下好孝

## 要 旨

日本語教育において「の」と「こと」の使い分けがよく問題とされる。この使い分けに関しては現在まで多くの研究があるのだが、未だにはつきりした使い分けの基準は示されていない。

従来、統語的・意味的な観点から議論されてきた「の」と「こと」の使い分けに関し、この研究ノートでは音声的な観点から議論をスタートさせる。その分析を通じ、いままでの議論を検証する。

結論として、「の」に先行する節には「唯一性 uniqueness」があることを主張する。一方「こと」に先行する節は、形式名詞「こと」の修飾節となることを立証し、連体修飾という機能から「の」に見られる唯一性を持たないことを主張する。

〔キーワード〕「の」と「こと」、名詞修飾、名詞化接辞

## 1. 問題の所在

日本語教育ではよく「の」と「こと」の違いが問題になる。それというもの、多くの場合「の」と「こと」が置き換え可能で、その違いに明快な説明が見つからないからである。

- (1) 山田は書類を持ってくるのをすっかり忘れてしまった。
- (2) 山田は書類を持ってくることをすっかり忘れてしまった。

しかしあるコンテキストが与えられると、片方が選択され、もう一方の使用が不自然となる場合がある。

- (3) (日本語教師が小テストを回収しているときに)  
学生：先生！ 名前を書く(の／?こと)を忘れました。

(以後、不自然な文には?、非文法的な\*を付す)

「の」と「こと」に関しては、置き換え可能であるが場合が多いが、ある種の述語とは一定の共起関係が認められ、「の」を選ぶか「こと」を選ぶかは自動的に決まるとされる。その一つの例が「見る」「聞く」等の知覚動詞の例である。

(4) 山田が歩いている (の / \* こと) を見た。

一方、「こと」と共起する例として「～ことができる」「～ことにする」などの慣用表現がある。

(5) 山田はスペイン語を話す (\* の / こと) ができる。

ところが(5)に現れる「～ことができる」という表現で、「の」と共起する例も見られる。

(6) うちのお母さんは、足で戸を開けたり閉めたりするのもできるの。  
野田尚史「はとが」p.48 (くろしお出版) より

このような例はどのように考えたらよいのであろうか。

従来は、統語的・意味的観点から「の」「こと」節と組み合わせられる主節の述語の分析や、「の」「こと」に先行する従属節の分析などが行われてきた。本稿は「の」「こと」節の音声的特徴から、これらの使い分けのヒントを探ってみたい。

## 2. 音声的な面からの考察

多くの研究書で「の」と「こと」は形式名詞だとされている。

(7) この章では、形式名詞といわれる「の」と「こと」の選択についてお話しします。形式名詞というのは、名詞化素 (nominalizer) とも呼ばれていますが、[1]のように、直前の動詞を、英語の不定詞や動名詞のように、名詞化する機能がある文の要素のことです。

[1] 私は言語文化的なことを考える {の／こと} が好きです。

牧野成一 (1996: 130)

しかし先行する節の発音、特にアクセントを考慮に入れると、両者には違いが出るのが分かる。以下、アクセントの核 (滝) の部分を「」の記号で示す。

(8) 先生の話を聞くことが大切だ。“聞くこ (きくこ「」)”

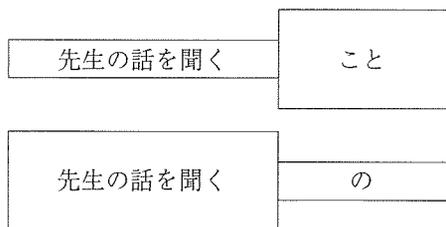
(9) 先生の話を聞くのが大切だ。“聞くの (きく「」の)”

(8) では形式名詞「こと」のアクセント核がそのまま維持されているし、先行する節の発音にも変化がない。つまり名詞修飾の一般的な音声規則に従っているのである。

一方 (9) では「の」が節につくことによってアクセントに関し無核類動詞である「聞く」の終止形が「尾高型」で発音されるようになる。このように先行する語のアクセントパターンを変更させることがあるのが接尾辞の特徴である。

そのように考えると、「こと」による名詞化は、実は形式名詞「こと」が連体修飾されていると見なせる。そして、この構造の中心部は名詞「こと」であると言える。一方「の」は先行する節に後接する接尾辞である。そして、接尾辞付加された節がこの構造の中心部となる。図示すると次のようになる。

(10)



「こと」に先行する節が連体修飾節であるとすると、連体修飾構文の特徴として他にも連体修飾の候補となる節が予想出来る。

- (11) a. 宿題をする こと
- b. 予習をする こと
- c. 授業に集中する こと 等

一方、名詞化接辞である「の」にはそのような修飾構造は想定できない。むしろ話者の脳裏にある唯一の節を名詞化したのであると考えなければならない。

大事MANブラザーズバンドの「それが大事」という歌には

- (12) 負けないこと
- 投げ出さないこと
- 逃げ出さないこと
- 信じ抜くこと
- 駄目になりそうな時
- それが一番大事

というフレーズがある。ここでは「こと」節で表される内容は連続して現れる。つまり「こと」節は連体修飾部によって多様な事態を含意しうると言うことである。それに対し「の」に先行する節にはそのような修飾の意味はない。むしろ、一つの節として独立して存在していると考えられる。

さらに、「こと」と「の」にはともに聞き手に対する勧告、命令としての用法がある。

- (13) 授業中は静かにすること。
- (14) 授業中は静かにするの。

上記の「それが大事」という歌で見たように(13)の「こと」構文は複数の内容を並列的に示すことが出来る。一方「の」に導かれる用法では不自然となる。

- (15) ?負けな<sup>レ</sup>いの
- 投げ出さ<sup>レ</sup>ないの
- 逃げ出さ<sup>レ</sup>ないの

## 信じ抜くの

上に述べたように「の」に後接される節は「こと」に先行する修飾節のような多様性を含意しない。そこで「の」に後節される節には「唯一性 uniqueness」があると仮定する。そのように仮定すると、(15)のように、聞き手に多くの要望、忠告を同時にするようなシチュエーションでは使えないことが理解できる。一方、「こと」に先行する節には、修飾という機能を通じて「非・唯一性 non-uniqueness」、つまり他の命題を前提とすることを可能にしていると考ええる。

以下の節では意味的・統語的な観点による先行研究の主張と、今回本稿が主張する音声学的見地から得られた知見がどのように合致するかを確かめてみる

### 3. 久野 (1973)

久野 (1973) は「こと、の」の選択が、主節の動詞、形容詞、形容動詞によって規制されていると同時に、従属節の意味内容によっても二次的に規制されるとする。

まず「の」は語感によって直接体験される具体的動作、状態、出来事を表すとする。

[14] a. 私ハ太郎ガ花子ヲブツノ (\*コト) ヲ見タ。

そして、従属節中の命題が抽象概念しか表し得ない場合には「こと」しかとれないと主張する。

[17] a. 太郎ハコロンバスガアメリカヲ発見シタ {コト/ノ} ヲ知ラナカッタ。

b. 太郎ハ人間ガ羽ノナイ二本足ノ動物デアル {コト/\*ノ} ヲ知ラナカッタ。

[19] a. 太郎ガ死ンダ {コト/ノ} ハ確カデス。

b. 太郎ガ10才デアル {コト/\*ノ} ハ確カデス。

久野 (1973) が指摘する、語感で直接体験される具体的動作、状態、出

来事は、文中で、それそのものが意味的な焦点を形成する。そう考えると、他の動作、状態、出来事を頭に浮かべることなく話者は発話しているはずである。したがって、本稿が主張する「唯一性」と相反するものではない。

一方「こと」を修飾する節には抽象的なことがらが現れる。様々に想定される抽象的なことがらから一つを選択して発話されるからだと考えられないだろうか。

#### 4. 橋本 (1990, 1993)

橋本 (1990) では「の」と「こと」の分布に関して次の二つの意味規則を提案している。

(16)

意味規則Ⅰ 「の」のみが許される文には、主文のあらゆる出来事と補文のあらゆる出来事のあいだに、同時性、同一場面性といった意味的な〈密接性〉がある。

意味規則Ⅱ 補文の意味役割が〈対象となることがら〉ならば「の」「こと」の両方が許される文になり、〈生産されることがら〉ならば「こと」のみが許される文になる。

意味規則Ⅰが適用されるのはいわゆる「知覚動詞」を用いた文である。

(4) 山田が歩いている (の / \* こと) を見た。(再掲)

意味規則Ⅱの〈生産されることがら〉とは、以下の例文に見られるような命令、要求、証言などの動詞に導かれるものである。

[33] 係員はたけしに部屋から出る ?? の / こと を命じた。

[35] A氏は当時松本氏が陸軍司令部にいた ?? の / こと を証言した。

橋本 (1990) の主張する〈生産されることがら〉というのは意味規則Ⅰの「同時性、同一場面性をもつ」ことがらと対極をなす。同時性、同一場面性をもつことがらであれば、その場における「唯一性」が保証される。

一方、〈生産されることがら〉はそのような唯一性から解放され、さまざまながらを想定することが出来る。実際の発話ではそのうちの一つが選択され、「こと」の修飾部に生起するのだと考えられる。

さらに橋本（1993）では久野（1973）の「命題が具体的なものか、抽象的なものか」に基づく使い分けを批判し、次のような例文を提示している。

[29] 太郎が10才でない の／こと は確かです。

久野（1973）に示された

[19] b. 太郎が10才デアル {コト／\*ノ} ハ確かデス。(再掲)

の文法性判定が、命題の抽象性をその根拠にしているならば、[29]の文法性判断とは合致しないと言うのである。

しかし、「太郎が10才でない」という命題は「太郎が10才である」という命題を否定したものである。橋本（1993：158）で示されている[29]の文は、おそらく「太郎が10才だ」という発話が先行文脈にあり、それを別の話者が否定していると考えるのがもっとも自然である。

そうすると[29]は「太郎が10才であるか、どうか」という一つの命題を巡っての談話で出現したと考えられる。その場合、発話当事者の脳裏には他の命題は問題になっていないはずだ。そのような場合、「の」構造のもつ「唯一性」が発揮されるのではないだろうか。

## 5. 鎌田（1998, 2001）

鎌田（1998）では「の」と「こと」の使い分けに関し、次のような選択規則を提案している。

(17)

選択規則Ⅰ：内容節の主語が省けずに常に時制節となる必須主語の時制節はノ専用、常に非時制節となる空主語の非時制節はコト専用となる。

選択規則Ⅱ：現実活動動詞で内容節が時制節の場合、1. テイル等の実現系の時制形態をとる場合はノ、2. ル等の未実現形をと

る場合はコトとなる。

選択規則Ⅲ：内面活動動詞で内容節が時制節の場合、主動詞の他動性が強い程コトをとり、他動性が弱い程ノをとる。

鎌田（1998）は、選択規則Ⅰにより「～ことができる」「～ことにする」「～ことがある」などにおける「こと」の選択を説明している。これらの慣用的な表現は「空主語の非時制節」であり、「コト専用」であると主張している。

「非時制節」は具体的な事態の生起を含意せず、久野（1973）で主張されるように抽象的なことがらを導きやすい。また、同時性、同一場面性に基づく橋本（1990）の意味規則Ⅰに当てはまらないケースでもある。したがって「の」とは生起しにくいことは理解出来る。

しかし、本稿の1.で見たように

- (6) うちのお母さんは、足で戸を開けたり閉めたりするの  
できるの。 (再掲)

のような例もあることを無視は出来ない。

選択規則Ⅱは、内容節の事象が現実界に既に実現してるか、実現が前提されている場合は「の」を選択するというものだ。逆に、未実現の事象、主文と同時に実現し得ない事象には「こと」を選択する。

ここでも「の」の持つ「唯一性」と「こと」の持つ「非・唯一性」がマッチすると考えられる。

選択規則Ⅲでは、主動詞の意志性という面から説明をしている。たとえば、「覚える」と「忘れる」では「覚える」の方が意志的、動作的である。そして「こと」は意志的な主動詞と共起するという仮説をたてている。その仮説から、意志的にコントロールできない「忘れる」はル形であっても「こと」を取れないと説明している。しかし、それでは、本稿で最初に提示した(1)と(2)については説得力のある説明とはならない。

- (1) 山田は書類を持ってくるのをすっかり忘れてしまった。 (再掲)  
(2) 山田は書類を持ってくることをすっかり忘れてしまった。 (再掲)

さらに鎌田 (2001) では、

(18) 「                    」コト／ノ は 「                    」コトだ。

という文型を取り上げ、コト名詞節は主語位置にも述語位置にも現れうるが、ノ名詞節は主語位置にしか現れないことに注目する。そして、それに対応する名詞節との比較から、コトは「不定名詞節」、ノは定名詞節であると主張する。

確かに

(19) 名詞句 A は 名詞句 B だ。

という構文において、主題となる名詞句Aは「既出」の、「定」のものであるのが普通である。しかしその定性を保証するのは「は」という主題を導く助詞の働きではないだろうか。主語位置に「こと」節がきても、「の」節が来ても定性に関しては違いはない。

むしろ述語位置における名詞句Bの「新情報性」に注目すべきではないかと考えられる。

たとえば

(20) このタオルはきれいですか？

という文では、述部に現れる情報が正しいかどうかを聞いているのであって、主部に関しては疑問のスコープの外にあるとされる。「AはBだ」という文型では、情報の焦点は述部に置かれるのである。

したがって

(21) 大切な (の／こと) は、学生をちゃんと指導する (\*の／こと) だ。

という文では

(22) 大切な の／こと は  $\left\{ \begin{array}{l} A \text{ ことだ。} \\ B \text{ ことだ。} \\ C \text{ ことだ。} \end{array} \right.$

という選択が述部に含意されていると思われる。そのため「唯一性」をもつ「の」節がそこには生起できないのである。

## 6. 「比較構文」、「用途をあらわす文」

前節までは、本稿の主張と先行研究の成果について比較してきた。この節では、先行研究で取り上げられなかった文型について試みる。

まず、比較構文を考えてみよう。

- ⑳a. 私は野球を見ることより、することの方が好きです。
- b. \*私は野球を見るのより、するの方が好きです。
- c. 私は野球を見るより、する方が好きです。

「～ことより～こと」という比較構文では「の」節は現れない。二つの「こと」を比較する場合、「の」節がもつ唯一性はその生起を妨げているのだ。<sup>1)</sup>

次に、「～に使う、～に便利だ」などといった、従属節に「用途」をあらわす内容を要求する述語について見てみる。

- ㉑a. このハサミは、肉を切るのに使う。
- b. ?このハサミは、肉を切ることに使う。
- ㉒a. このハサミは、肉を切るのに便利だ。
- b. ??このハサミは、肉を切ることに便利だ。
- ㉓a. このハサミは、肉を切るのにいい。
- b. \*このハサミは、肉を切ることにいい。

ある道具について、その用途を語るとき、通常は唯一の用途を想定するはずである。上記の例からもわかるように、このような場合「こと」は使われない。

先行研究では取り上げられていないこれらの構文でも、本稿が主張する「の」節の唯一性という意味特性が作用していると考えられる。

## 7. まとめ

本稿では「こと」節と「の」節の構造を音声的な観察した。その結果、「こ

と」に先行する節は、名詞「こと」にかかる修飾節であること、「の」に先行する節は、名詞化接尾辞「の」によって名詞化された節であることを見た。

この二つの構造上の違いが、意味の違いにつながっているのではないかと考え、いくつかの先行研究の成果と照らし合わせてみた。その結果、文法的な考察と本稿の考察にはあまり食い違いが見られないことが分かった。

では問題提起に終わった二つの例を、もう一度検討してみよう。

(3) (日本語教師が小テストを回収しているときに)

学生：先生！ 名前を書く（の／？こと）を忘れました。（再掲）

(6) うちのお母さんは、足で戸を開けたり閉めたりするのもできるの。

(再掲)

(3) では、日本語教師が小テストを終えて答案を回収するというコンテキストが与えられている。このような場合、学生が「し忘れる」ことには多様性はほとんどない。想定できるのは実際に発話されているように「名前の書き忘れ」くらいである。<sup>2)</sup>

(6) では、ある子供が母親の能力についていろいろ言及した後、究極的な能力として「足で戸を開けたり、閉めたりする」ことを友人の母親に語っているというシチュエーションで発話されたものだ。究極のものであることは、取り立ての助詞「も」を使用されていることから理解できよう。

(3) や (6) のシチュエーションでは、まさに「の」節が特徴とする唯一性が色濃く出ているのではないだろうか。

今後は、「の」が生起する他の構文においても、今回考察したことが当てはまるかどうか検討してみなければならない。<sup>3)</sup>

今回は「の」と「こと」は異質のものであるという前提にたって論を進めた。すると「こと」と本当に対比して研究しなければならないのは「もの」「はず」「わけ」などの形式名詞であることが分かる。

今回の研究レポートからそれらの問題に展開することが今後の課題である。

注：

- 1) アンソニー・エドガー・バックハウス教授（北海道大学留学生センター）のご教示による。
- 2) 同様のシチュエーションで、非常に格式ばった言い方をした場合、「こと」節の使用が可能になる場合もある。
  - a) 先生、まことに申し訳ないのですが、名前を書くことをうっかり失念してしまいました。今から記入してもよろしいでしょうか？

「こと」は改まった文体で、「の」はくだけた文体で現れやすいという特徴もあるようである。

3) 「の」が生起する他のケースとは

- b) 先週、静岡に行ったの？
- c) これは、私が買ったのです。貰ったではありません。

などである。

参考文献：

- 久野 暉（1973）『日本文法研究』（大修館）
- 牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学』（アルク）
- 橋本 修（1990）「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163集、pp(1)–(12), 国語学会
- 橋本 修（1993）「「の」補文の統語的・意味的性質」『文藝言語研究（言語篇）』25、pp153–166、筑波大学、文芸・言語学系
- 鎌田倫子（1998）「内容節をとる動詞のコトとノの選択規則」『日本語教育』98号、pp1–12、日本語教育学会
- 鎌田倫子（2001）「日本語教師の課題「ノとコトの使い分け」の現在」、『日本語学』vol.20-3、pp26–35、明治書院

やました よしたか（留学生センター助教授）

## On *no* and *koto*

– From a phonetic point of view –

YAMASHITA, Yoshitaka

In Japanese, the use of *no* and *koto* is complicated. It has been thought that these two forms are pseudo-nouns which lack substantial meaning.

But if we consider them from a phonetic point of view, it is clear that *koto* is a noun while *no* is a suffix which nominalizes a clause. A clause which precedes *koto* has a noun modifying function while a clause to which *no* is attached lacks such a function. To modify a noun implicates that there are other possible classes of the noun. This leads to the hypothesis that the *koto* construction may select from a range of variation, while the *no* construction intrinsically focusses on "uniqueness".

This study examines the validity of the hypothesis in comparison to previous syntactic and semantic analyses of *no* and *koto*. It is found that in some cases this hypothesis can clarify questions which previous studies did not explain.